

4 全体会 トークセッション

San-En-Nanshin Summit 2017 in Minamishinsyu

○トークセッション

テーマ「三遠南信のトップリーダーが語る地域の未来」

コーディネーター：学校法人梅村学園 常任理事・学術顧問

発言者： 国土審議会会長 奥野信宏 氏
愛知大学理事長・学長 川井伸一 氏
豊橋技術科学大学 理事・副学長 大貝彰 氏
学校法人高松学園理事長、飯田女子短期大学学長 高松彰充 氏
豊橋商工会議所会頭 神野吾郎
浜松商工会議所会頭 大須賀正孝
飯田信用金庫 理事長 森山和幸 氏
愛知・長野県境域開発協議会会長 天龍村長 永嶺誠一
浜松市長 鈴木康友
豊橋市長 佐原光一
飯田市長 牧野光朗

コーディネーター

学校法人梅村学園常任理事・学術顧問

国土審議会会長 奥野 信宏 氏



トークセッションのテーマは、「三遠南信のトップリーダーが語る地域の未来」です。先ほどの基調講演では、新たな国土形成計画で描いている国土構図はどういうものか、その中で、三遠南信というのはどういう意義を持っているのかといったことについて一般的な話をさせていただきました。このパネルでは、トップリーダーの方々から、三遠南信の

各都市と各分野の連携をどう進めるか、具体的にどのような地域をつくるか等々について話をさせていただき、さらに理解を深めてもらいたいと思います。

ステージには、先ほど御紹介のありました10名の方々に座っていただいております。時間が限られておりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

トークセッションセッションは全体を大きく二つに分けております。

第1部では、各分野について関心を持っておられることについての状況、課題、将来等についてお話をいただきます。

第2部では、第1部についての追加の御発言、それから、他のパネリストの御発言についての感想、意見等をいただいて、必要に応じてディスカッションを行うということにしたいと思います。

早速、第1部に入ります。第1部では、パネラーの方が産官学について関心を持っていらっしゃることに付きまして、状況、課題、将

来等について御報告をいただきます。

それでは、最初に川井先生お願いします。

愛知大学理事長・学長 川井 伸一 氏



まず1点として、中部圏における三遠南信地域の戦略的な重要性という点です。

中部圏の変化は、リニア中央新幹線による名古屋の都心の変化が大きいとみられています。三遠南信地域は、広域連携の先進的な地域という評価をいただいておりますが、その三遠南信地域のこれからの目標、戦略も、名古屋の変動と連携しながら、世界で戦える中部圏を形成していくべきではないかと考えております。

そのためには、飯田地域や県境山間地域及び豊橋市、浜松市の沿海都市地域のそれぞれの戦略を明確にしていく必要があるのではないかと思います。その点におきまして、SENAの役割は非常に大きい。昨年の9月になりますが、本学はこのSENAと協定を結んで、本学にSENAの事務局の分室を置くことになりました。この役割をさらに強化していきたいと考えております。

以下、大学としての考えにつきましては、簡単に3点ばかり申し上げたいと思います。まずは、今申し上げましたが、愛知大学には、このSENAとの関連で言えば、三遠南信地域連携研究センターがございまして、三遠南信地域をテーマにした研究を進めている組織です。文部科学省の共同利用研究拠点として、この越境地域政策研究の全国的な拠点の一つとな

っています。

やはりこれは、将来の地域社会像をいかに描くかということが課題で、それにつきましては、いろいろな分野からの学際的な取り組みが重要ではないでしょうか。本学は人文系、人文社会科学系の総合大学ですが、各分野からの学際的な取り組みが重要であるということがまず第1点です。

第2点は、大学として、当然人財育成ということが主要な課題です。その点におきまして、地域創造型の人財育成に努めていきたいと思っております。人口減少の局面にありまして、地域の人財をいかに育成するかということが、これからの重要な課題の一つでございます。

その際に特に注目したいのは、地域が抱えている課題を発見し、それをいかに解決していくのかということについて、フィールドを重視した産官学の連携による人財育成の枠組みやシステムを構築していくことが必要ではないかと思っております。

本学は、建学の精神といたしまして、地域社会に貢献する人財の育成、地域社会・地域文化への貢献ということを掲げています。それは全学部での共通課題であります。とりわけ、そういう課題をカリキュラムにも強く反映しているものが、本学にあります。地域政策学部でありまして、地域の課題を担う人財を育成するということを主眼にしています。

したがいまして、そのような人財育成プログラムを作成し、今後も、それを発展させていく必要があります。

最後になりますが、3点目といたしまして、この三遠南信地域をいかに位置づけるかということで、いろいろな視点があるかと思っております。中部圏におけるということが一つの視点であります。さらに広くは、やはり国際的な視点ということも重要ではないかと思っております。愛知大学は海外の多くの大学・研究機関と協定を結んでおりますので、そういうネットワークも生かしながら、この地域の国際的

な視野から見た、その比較や特性ないしはお互いの協力ということも含めまして、世界中の三遠南信という視点を大切にしていきたいと考えております。

コーディネーター

ありがとうございました。

愛知大学の三遠南信地域連携研究センターと地域政策学部は、重要な役割を果たしていらっしゃると思います。あまり名前を挙げてはいけないかもしれないけれども、三遠南信地域連携研究センター長の戸田先生などは国の会議などへもいつも来ていただいて、貴重な話をしていただいています。

それでは、豊橋技術科学大学 大貝先生、お願いします。

豊橋技術科学大学理事・副学長 大貝 彰 氏



個人的には、この三遠南信地域に二十数年、ほぼこのサミットの開催の回数と同じくらいかかわり続けてきておりますが、本日は大学の立場ということで、少し発言させていただきたいと思います。

本学、いわゆる工学系の単科大学です。そういった大学が、この三遠南信地域あるいはこの地域に対して、どう貢献ができるかという立場から、2点ほど発言させていただきたいと思います。

当然ながら、今、愛知大学の川井先生からも御発言がありましたように、今の日本の大

学の置かれている状況としては、人財育成あるいは研究という点において、国際化ということは、もう外せない視点になっているわけです。国際化と地域という、その両立をさせていくことは大事なことです。本学のような工学系の大学として大事な点の一つ、大きな点は産学連携、あるいは行政も含めて産学官の連携です。これを大学としてどう進めていくかということは非常に大きな課題でもあり、本学、昨年、開学して40周年を迎えましたけれども、開学以来、その推進をずっと進めてきておりますが、なかなか思うように進んでいないという課題もあるのが実情です。

本学としては、産学連携を頑張っております。平成27年度、文部科学省が産学連携の実施状況というデータを取りまとめておりますが、例えば、研究者が300名未満の小規模な研究機関の中で、民間企業との共同研究費の受入額は全国2位です。実は、ほとんど差はないのですが、1位はもう一つの兄弟校の長岡技術科学大学です。

それから、同一圏内企業、あるいは地方公共団体との共同研究、受託研究などの実施件数についても、東海地方の研究機関の中では6位です。

また、最近はURAという研究をコーディネートする方が大学におられますが、そういったURAが比較的少ない大学の中では、本学は全国1位の共同研究の受け入れ額となっております。

そういった意味で、かなり積極的に産学連携を進めてきているわけですが、実は、もっともこの拡大を強力に進めていく必要があるかと思えます。ただ、そのためにどうすればいいのかということが、なかなかその答えがまだないところです。こうすればうまくいくということは、そう簡単ではありません。

実は昨日も、豊橋市で本学主催の産学連携をテーマにしたシンポジウムを開催させていただきました。その中で、こちらにおられま

す豊橋市の佐原市長と豊橋商工会議所の神野会頭にもパネラーとして御登壇いただいて議論をしてきたところです。

そこで一番御指摘があったのは、やはり大学の先生と地域の企業の方々の間をつなぐ役割を担える人がなかなかいないということです。こういった人財をこれからどう育成していくのか、あるいはそういった人財をどう見つけてくるのかということが、これからの産学連携にとっては非常に重要になるのではないかと考えております。そういったことができれば、この地域のますますの発展、先ほど奥野先生から大学に対するこれからの期待、熱源という御発言もありましたが、そういった意味で、熱源になり得るのかなと思っております。

コーディネーター

ありがとうございました。

豊橋技術科学大学は、私の記憶では、日本の産学連携のモデルとしてまずつくるのだということで、行政の協力もあってできたと思っておりますが、三河や遠江等々の企業のバックボーンとして活躍していらっしゃるわけです。私は前の大学にいるときに、そういうワンストップサービスを名古屋大学でできないかと思って始めました。一般の方々にとっては、大学の敷居は高いのだそうですが、それをやりかけて、名古屋大学を辞めたので、現在どうなっているかわかりませんが、なかなか豊橋技術科学大学のようにはいかないのだろうと思っております。

では、続きまして、学校法人高松学園飯田女子短期大学 高松先生、お願いいたします。

学校法人高松学園理事長、飯田女子短期大学学長 高松 彰充 氏



こちらにおられる方々は、飯田の方が1番多いのだと思いますが、飯田女子短期大学は産業系の学校ではありません。置かれている学科は、看護であり、介護であり、あるいは保育でありという、そういう何かをつくるというよりも、むしろこの社会を支えて、先ほどの奥野先生の言葉で言えば、安心や安全といったものを確保していくという学校です。だから今後、この未来に何ができるのかということをお話するのは、申し訳ありませんけれども、立場上、非常に難しいなと思っております。私自身は、大学に通っていた時間以外の時間を全てこの飯田で過ごしておりますから、約50年近くこの飯田にいることとなります。大変不躰でございますけれども、一飯田市民として感じたままの飯田のことを語らせていただきたいと思っております。

私が生まれたのは昭和39年、東京オリンピックの年で、非常に社会が揺れ動いている時期でした。私が生まれてから後の自分が思い出すのは、飯田がどう変わっていったかというところであり、この点について言えるのではないかなと思っております。

まず、私の感覚ですと、飯田の流通の歴史は、交通の改革で随分変わりました。私が幼少の頃は、この飯田市と外部を結ぶものは、細い道を除いては、JR飯田線しかなかったわけです。東三河と遠州と南信州のつながりは、

そのときが一番強かったと思います。

冬にミカンが来れば、まず三ヶ日のミカンというように、当時は多くが遠州地域から来ていました。そして、私たちはどこに行くにも必ずJR飯田線で豊橋まで出なければならなかった。だから、東三河と遠州と南信州はJR飯田線で自動的につながっていたし、私どもが何かを買ったり、どこかに行ったりするときには必ず通らなければならない道だったのです

ところが、私が小学校のときに中央自動車道が開通しまして、まず名古屋とつながりました。途端に流通が一変して、東三河と遠州に向いていた道が一気に名古屋圏、中京圏へ流れるようになりました。ですから、しばらくの間、飯田は名古屋圏、中京圏を中心に回っていたかと思います。私も東京に行くときに、わざわざ名古屋に出て、そこから新幹線に乗っていったことが何度もありますから、その道が一番、この地域と外部を結ぶ道になりました。

その後、中央自動車道の全線開通で東京にもつながっているわけです。したがって、今、私どもは、例えば、ネットショッピングをすれば、東京あるいは中京圏から来ることになりますから、二大都市圏からこちらにつながっているということになります。

そういう観点からいきますと、三遠南信自動車道、とても魅力的な道なのですが、では実際に開通して何が変わるのかと考えてきたときに、流通の大もとである東京と名古屋とはもうつながっているのです、では、あの道に一体何が通るのだろうかということを考えてしまうわけです。

一番考えられるのは、それぞれの地域でしか買えないものが来るという、いわゆる特産品流通道路ということになりますよね。あるいは観光道路になります。

しかし、例えば、豊橋市や、浜松市のように非常に大きくて魅力ある都市と飯田市が本

当に現時点で肩を並べて「飯田市だぞ」と言えるのかということ、非常に不安を感じてしまいます。ここから豊橋市、ここから浜松市に遊びに行くことはあるけれども、果たして、例えば、浜松市や豊橋市の方が三遠南信自動車道を通って飯田市に遊びに来るのか、私の感覚からいくと、例えば、飯田市を通り越して、中信、北信のスキー場に行くため、あるいは山登りをするためなど、いわゆる飯田市は単なる通過点になってしまう可能性が非常に高いのではないかと危惧をしているのです。

数年後にはリニア中央新幹線も開通します。リニア中央新幹線の拠点と先ほどから何度も声が出ています。私、新幹線に何度も乗りましたが、一方で1度も降りたことがない駅があります。乗客があまり乗り降りしたところを見たことがない駅もあります。もしかしたら、今のまま、ただ通っただけと、飯田市がそういった単なる駅だけあるところになってしまう可能性があるのではないかと、とても不安なのです。東京や名古屋へ出ていくことはあっても、南信州地域へ入ってくるのではないということになりますと、とても寂しいことになってしまいます。

今、我々がしなければならないことは、飯田市の魅力とは何だと見つけることであり、そして、それを積極的に育てていくという、マクロだけではなくて、ミクロな視点も非常に重要になってくるのではないかと思います。

私が「飯田の魅力は何ですか」と学生に聞くと、答えが何も返ってこないです。学生の8割近くは飯田市周辺の出身なのですが、これは寂しいなと思いました。皆様はきっと、何かしらを答えられると思います。でも、それが果たして、例えば、浜松市や豊橋市の人を引きつけるのにふさわしいレベルのものなのか、そうでなければそこまで育てていかなければいけないと思います。リニア中央新幹線が開通し、三遠南信自動車道が開通する時代を前に、まず私どもが考えなければならない

のは、飯田市を単なる通過点にしないことにほかならないのではないかなと思います。

では、何を育てていけばよいかと言われてもなかなか私も思いつかないのですが、一つだけ言えることは、私も飯田市に住んでいて、いろいろな意味で大き過ぎず、小さ過ぎず、暮らすにはちょうどいいと感じており、結構捨てたものではないなと結構好きなのです。

飯田市は、皆様も御存じだと思いますが、日照時間が非常に長く、晴れの特異点ですよ。全国的にも珍しいレベルで晴れの日が多い、そういう場所ですよ。昭和36年に大きな災害がありましたが、そのときに大きな整備をしたおかげで、今、飯田市では、ほとんどそういう災害が起こらないです。

災害に強くて、例えば、どんなに日照りが続いても水も枯れません。私が生まれてからこの方、水道が断水で止まったという経験はほとんどありません。ですから、そういうところを生かして、しかも、これからリニア中央新幹線が開通し、高速道路が四方八方から向いてくるといふこの地の利を利用することができるわけですから、例えば、物すごく極端な例で言いますと、首都の移転やあるいは省庁を積極的に呼び込もうとか、そこまでいかなくも、流通や経済などいろいろなものの拠点となるという考え方ができるのではないかな、もちろんそれをするには大変なものが必要だと思いますが、もっともっと「飯田市というところはこんなところなのだよ」ということをアピールしていくことによって、そういう生き残りの道もあるのではないかなと思います。もちろん私のざれごとではありますけれども、飯田市が今のままですと、少し寂しい未来が待っているのかなと思います。

ただ、今の飯田市も私、十分好きですので、この雰囲気を残しながら、ぜひ発展していただく、そのような道を歩んでいきたいと思うわけでございます。

コーディネーター

ありがとうございました。

私は、リニア中央新幹線ができれば、通過点というよりも、ゲートウェイとしての意義が大きいと思うのです。北の駒ヶ根市から南の浜松市のゲートウェイとしての意味は大きいですし、東京までは近いし、名古屋までも15分か20分です。電車賃の問題はありますが、先ほどのワーク・ライフ・バランスの拠点として、これは飯田市だけでなく、甲府や中津川などでも注目しているところです。

どうもありがとうございました。

では、続きまして、豊橋市商工会議所 神野会頭、お願いいたします。

豊橋商工会議所会頭 神野 吾郎



経済・産業界の立場から、経済をどうやったら活性化できるかということを考えているわけですが、今、お話がずっとありましたように、やはりそれぞれが持っている価値、つまり会社の価値だったり、地域に住みたいという価値だったり、学校の価値だったり、そういうのを高めることが第一だと思います。

それだけでは足りなくて、人が住むためには多様性などいろいろなことが大事ですので、そういった意味では、ネットワークが必要だということなので、豊橋商工会議所が音頭を取っている東三河広域経済連合会では、様々な連携を進めています。まず、皆様からお話がありました産学官の連携、それに加えて、農工商医の連携を進めております。も

う一つは、やはり地域連携です。地域連携は、東三河という単位もありますし、この三遠南信という単位もあると思いますが、こういった地域連携においてそれぞれ違ったものと連携をすることによって新しい価値が必ず生まれるということを思いますし、今はそういった時代ではないかなと思います。その連携等を可能にする人、ファシリテートできる人、これをやはり実践の中で育てていくことが極めて大事だと思っています。

そういった中で、今日は二つ提案をしたいと思っています。

一つは、豊橋市がパートナーシティ提携していますドイツのヴォルフスブルグというフォルクスワーゲンの本社がある都市です。フォルクスワーゲンの車を輸入している三河港があるということで、30年くらい、私もかかわっているのです。ヒトラーがつくったフォルクスワーゲンの工場のある町ですが、もともと工場しかない小さな町で、90%以上がフォルクスワーゲンに勤めているというような町だったわけです。

1990年代の中くらいから、海外移転やドイツの産業構造の変化の中で非常に疲弊をして、失業率が20%近くまであったのですが、そのときにヴォルフスブルク AG という、まちづくり会社、地域づくり会社みたいなものを産官でつくりまして、都市計画であったり、商業であったり、教育のことであったり、流通のことであったり、スポーツのことであったり、いろいろな取り組みを全部行いました。それによって、今では大変魅力的な町になりました、ドイツでも有数の住みたい町になっているということです。個人としてのファシリテーターも必要ですが、株式会社がいかどうかかわりませんが、ファシリテートできる組織の存在が必要かなと思います。

もう一つは、JR 飯田線についてです。本日前中の経済界の会議でもそういうお話がありました、この豊橋市、浜松市、飯田市を

つなぐ JR 飯田線を、運行は JR 東海にやっていただくにしても、DMO みたいな運用組織、こういったものを地域でつくってみるというようなことで、その JR 飯田線をシンボリックな象徴として、三遠南信地域がいろいろな切り口を考えると、それは全国、また、世界から人を呼び込むことができ、面白いのではないかと思います。

コーディネーター

ありがとうございました。

豊橋市は何ととっても、オンリーワンというか、ナンバーワンというか、車の輸入港である三河港がございまして、私は、三河には国際スクールのようなものが要るのだろうと感じています。

ありがとうございました。

それでは、続きまして、浜松商工会議所大須賀会頭、お願いいたします。

浜松商工会議所会頭 大須賀 正孝



経済界から言いますと、浜松という町の工業は、自動車産業、ピアノ・楽器産業、あと光産業という三つで成り立っています。皆様、そして浜松の人も、浜松市は工業都市と思っているけれども、実際は、浜松は農業も、商業も、結構バランスがとれている町です。そういった視点から考えると、浜松はこの三遠南信自動車道が開通したら、様々な産業が交流できる本当に夢の道路だという感じがします。

今朝もここへ車で来ましたが、豊田経由で行きますと、3時間もかかり、お金も非常にかかります。これが、三遠南信自動車道ができると、時間もお金も半分になり、経費全部が下がっていきます。時間も半分、コストも半分になるということはものすごい経済効果です。それと、この長野・飯田の方が1時間で浜松まで来ますと、夏場になると海水浴も簡単に来られます。道路ができて近くなるということは、こうしよう、ああしようではなく、そのときに「あれもできる、これもできる」ということで、今は思いつかないようなことがいっぱい出てくると思います。

したがって、三遠南信自動車道は、絶対に夢の道路であり、三遠南信地域の交流が本当に上手くいくためには、この道路を何が何でも早く開通させなければいけないということです。

コーディネーター

ありがとうございました。

今、会頭から、速く行けることの大事さの話がありましたが、大事なことですね。高速道路ができることによって、距離が離れていても産業に集積の利益が出てくると思います。いろいろな産業が一つの町の中に集約すると効率的になりますけれども、それと同じ効果を持つわけです。今、その効果がどういうものかについて国土交通省で分析を始められたところです。今からそういう点についても注目すべきだろうと思っています。

ありがとうございました。

続きまして、飯田信用金庫 森山理事長、お願いいたします。

飯田信用金庫理事長 森山 和幸 氏



本日は、南信州エリアの産業界代表ということで、私は金融機関ではありますが、産業界の立場で話をさせていただきたいといます。先ほど来、お話がありますように、2027年にはリニア中央新幹線が開通します。それと同時に三遠南信自動車道が全線開通できる見通しになっており、この地域が非常に大きく変わることは明白なわけです。

ただいまお話がありましたように、時間あるいは距離の短縮ということですので、このアドバンテージは非常に大きいと思っております。これを産業振興あるいは地域の活性化に生かしていくことが必要であるということです。

具体的な取り組み策はいくつかありますが、時間の関係もありますので、一つに絞って詳しくお話ししたいと思います。

道路開通のメリットの一番は、南信地域と浜松あるいは豊橋地域との距離が縮まるということで、そちらの地域の企業とのお取引が活性化することが最も大事だと思っております。

そのためには豊かな自然を生かした観光等での交流人口の増加や、今は働く場所が少なく若い人たちが都市部へ流出しているのですが、道路開通による地域の魅力を生かして、若い人たちを戻してくるというような取り組みを考えたいと思っております。

また、東海エリアの企業の皆様との取り組みについてですが、先ほどの基調講演でも、

東京一極集中という中で、国が災害に強い国をつくっていくというお話がありました。現在課題となっている首都圏での直下型地震や東南海沖の地震などに対する対応策は、リスク分散機能の視点や、IT化がどんどん進んでいる中でデータ等のバックアップ機能といった面から多くの企業の重要な課題になっていると思います。

企業や行政機関のBCP対策の最適な地域として、これから情報発信して、この地域へ企業、あるいは出先機関を持っていくということに取り組んでいけばいいかなと思っています。

現在は単なる長野県の南の県境が、三遠南信自動車道やリニア中央新幹線によって長野県の南の玄関口、それから三遠南信地域の北の玄関口という位置づけになることによって、東京や名古屋、また浜松、豊橋地区に企業や行政の拠点を集中させなくても、この飯田に分散して置いてもらっても全く困らない地域になるのではないかと思います。

現状、この地域は非常に高齢化率も高く、若年労働者も少ないという弱みもありますが、三遠南信地域の連携による力と、リニア中央新幹線及び三遠南信自動車道の開通による時間と距離の短縮効果という強みを生かすことで、産業振興、ひいては人口の移動といったところにもつなげていければと考えております。

コーディネーター

ありがとうございました。

飯田信用金庫には、もう一つ、別の顔といいますか、本日は時間がなくてあまりおっしゃらなかったかもしれないけれども、地域や市民団体の取り組みに対する金融支援を熱心にやっておられると理解しております、これは、全国の中でも有数の信用金庫だと思っております。

飯田信用金庫理事長 森山 和幸 氏

ありがとうございます。後程お話しをさせていただく機会があるそうですので、そのときに少しお話させてもらいたいと思っております。

コーディネーター

ありがとうございました。では、続きまして、愛知・長野県境域開発協議会 永嶺天龍村長、お願いいたします。

愛知・長野県境域開発協議会会長 天龍村長 永嶺 誠一



まず、私どもの協議会につきましては、愛知県と長野県の県境にある町村が、現在は5町村でございますが、相互協力と、それから、交流を通じまして県境地域の開発・振興を図りますとともに、県境を越えた新たな山村づくりを目指すために、昭和52年に発足をし、今年で40周年目を迎えるところでございます。この間、先人の皆様方の御尽力によりまして、道路交通、それから産業振興、住民交流など、様々な取り組みがなされてきています。

このたび、愛知大学三遠南信地域連携研究センターの御支援・御協力によりまして、「県境をまたぐ共生圏の創生」という冊子を発刊することができました。共同研究や御支援を賜りました研究センターの戸田センター長をはじめ、愛知大学の関係者の皆様、この場をおかりしまして御礼を申し上げるところでございます。

内容につきましては、後ほどごゆっくり御覧いただきたいと思いますが、本日は、その冊子の中にも掲載をしております、本年1月11日に、「県境地域連携による地域づくり」と題しまして議員の研修会が行われたわけですが、その折に、三遠南信の地域づくりへの期待、あるいは次期三遠南信地域連携ビジョンへの期待についての議論にも及んでおりますので、本日は、私からその点のことを踏まえてお話をさせていただければと思っております。

御承知のように、私どもの地域につきましては、長野、愛知、静岡の県境にある山間の地域でございます。現状では、人口減少、それから高齢化が極めて厳しい状況にあります。県境地域の各町村では、これまでに教育、それから林業、農業、観光、スポーツ、移住措置など、それぞれ独自の地域づくりを実践してまいったところでございます。

県境地域につきましては、三遠南信地域の中心部にちょうど位置しております、歴史的にも東西南北の交通が交差する地域でもございまして、リニア中央新幹線が整備される時代の中にあっても、その特性を失うことなく、地域の将来に結びつけることが必要であると考えています。

また、SENAが推進します三遠南信地域連携によりまして、ハード面では三遠南信自動車道をはじめとする道路整備、そして、ソフト面では、ドクターヘリや防災体制、広域的な文化・観光の情報発信や誘客に結びついており、山間部と都市部の連携の基盤が整備をされてきたところでございます。

その反面、これらの効果には都市部から山間部に及び切らない点が多々ございまして、特にリニア中央新幹線、それから、三遠南信自動車道の全通に際しましては、通過地域にならないための対応が今後必要になってこようかと感じているところです。

これらを踏まえまして、私ども愛知・長野

県境域開発協議会としましては、地域の持続性を確保するため、県境地域が一体となった計画の確立と、計画実現に向けた活動を進める決意をございまして、ぜひ次期三遠南信地域連携ビジョンにおきましても、次の取り組みにつきまして、ぜひ御支援いただければありがたいと思っております。

一つ目は、三遠南信自動車とのダブルネットワークとしての国道151号の整備、近隣エリアへのアクセスの確保、東西道路の整備、これが1点です。

2点目としましては、山間部の観光資源を生かしたJR飯田線の活性化。

3点目は、県境地域での茶臼山等を中心とした広域観光事業の促進。

4点目は、山間部定住促進と移住事業促進として、特に県境を越えた医療特性、山間部小規模企業への支援、結婚に対する後継者対策の都市部との共同事業の推進。

5点目としましては、地域の担い手となる人づくりのための教育の連携。

6点目としましては、流域圏における都市部市民、企業、行政など、様々なネットワークの構築。

以上の六つの項目でございます。

コーディネーター

ありがとうございました。

私の理解だと、最近、JR飯田線は移動手段というよりも、沿線の秘境をゆっくり走る鉄道としての全国的評価が高いようですね。移動手段としても大事だろうと思っております。

続きまして、SENA会長 鈴木浜松市長、お願いいたします。



三遠南信地域の連携は、県境を越えた広域連携ですが、まず県とは何かということを考えたいと思います。これは私の勝手な県の解釈でございますが、県には大きく二つの役割があると思います。

一つは、国のいろいろな方針や施策を確実に市町村に実行させて、そういう指導監督、あるいは財政的な面も含めての支援というある種、国の出先機関としての役割です。

もう一つ、防災や工業、農業、観光などといった広域の振興を広域行政として行うという、大きくはこの二つではないかと思っています。特に、このうちの後半の部分、いわゆる広域行政の部分を私はこの三遠南信地域の連携がむしろ主体的に担っていくことが必要ではないかと思っています。

例えば、私ども浜松市がございます静岡県は、もともとこの静岡県ができた経緯から言っても、浜松県と静岡県と足柄県という三つが合併させられて今の静岡県になっているものですから、東、中、西という三つの区域分けがあるのです。

では、私ども西部が何か東部地域と具体的な連携事業をやることかというのと、これはほとんどないのです。では、静岡県が担うべき広域行政は何だということ、あまりないのですね。ですから、必ず県としても、東部に対する施策、中部に対する施策、西部に対する施策と三つに分けなければいけません。

むしろ私どものところは、例えば、産業政策などでも、国の知的クラスターは東三河地域と組んで浜松・東三河のクラスターで認定を取っていますし、経済産業省の経済クラスターの場合は、三遠南信地域で認定をいただいています。これは県の境目というものは、いったい何だろうという話になるので、これからは、むしろこういう広域で行う施策については、県ではなく、もうこの三遠南信地域が主体的にこれを推進していく必要があるだろうと思います。

冒頭、私の挨拶のときに申しましたけれども、国もこうした地域連携や広域連携について大変高い価値を見出し始めていますので、むしろこの三遠南信地域がさらに実体を持って、今進めている広域連合などの実体をつかっていって、国の支援の受け皿になり、あるいは主体的に産業政策、観光や防災といった広域的な施策をこの地域が一体となって行っていくということです。

おそらく、南信州地域などもそうだと思うのですが、長野県一体でやるこういう行政はあまりないと思います。愛知県の場合は多少違うかもしれませんが、いずれにしても、私はもう県という境目は、これからはあまり意味がなくなってくるのではないかという気がいたしまして、そうした時代を先取りする取り組みとしても、この三遠南信連携というのは大いに推進をしていくべきだと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

先ほど、三遠南信地域は広域連携のモデルと申し上げました。特徴は、今、市長がおっしゃったとおりでして、カバーされている分野の範囲が非常に広いですね。広域連携の例としていつも挙げているのが、例えば関西の歴史街道計画ですが、これは広域観光に特化しています。それから、グレーター・ナゴヤ・

イニシアチブも成果を上げてきておりますが、これは海外企業の誘致ということですので、そういう意味では、三遠南信は一つの行政体のような、非常に広い分野だということが大きな特徴だと思っています。

では、続きまして、SENA 副会長 佐原豊橋市長、お願いいたします。

豊橋市長 佐原 光一



実は東三河の地域が遠州地域と南信州地域にずっとお待たせしましたという状態を20年近くつくっていたのです。それは、いろいろな広域の取り組みをするときに、浜松を中心とした遠州地域のまとまりと、飯田を中心とした南信州地域のまとまりに比べると、東三河は一体どうなっているのかという話がずっと残っていました。それを解消する答えとして東三河広域連合を発足して2年ですけれども、やっと動き始めました。

原点は、なぜ広域で連携してやるかということの答えみたいなものなのですが、私たち市町村は、基礎自治体と言いまして、都道府県とは違い、直接市町村民と向き合っているいろいろな仕事をやるという特徴を持っています。

でも、そういう仕事の中に、市町村同士が手を携えてやったらより効率がよくなる、効果的にできる仕事がある一方で、それぞれの市町村でなければわからないようなこともあります。そういったものを総合的に一番上手にやれる仕組みは何かということ考えたときに、東三河広域連合という道を歩むことと

しました。

東三河地域は、先ほど来のお話で言いますと、一番北には茶臼山のスキー場、南の太平洋岸には、冬でもサーフィンをやっているところがあるような多種多彩な特徴を持った地域です。地域の人たちがそれぞれの伝統・文化に則って行っているいろいろな行事や、仕組み、仕掛けがあります。こういった部分は、これまでどおり、それぞれの市町村が担っていけばいいし、それぞれの市町村民と直接対話する部分は、役場や市役所にお任せしてもいいけれども、一緒にやることで効率がすごく高くなるものについては、ぜひ一つのプラットフォームの中で一緒にやりましょうということで広域連合を始めました。

成果を皆様にお見せするということが、これからの大きな課題ではありますが、私たちは自信を持って、成長する広域連合として、ますます住民と直接向き合う仕事について都道府県から権限をいただいてやれることは広域連合で行い、市民に、町民に、村民に、より近いところでお届けしていこうではないかと思っています。

そして、もう一つ、広域連携をこれから三遠南信地域でも進めていこうとする中で、次のような事例が過去にありました。

私たち豊橋市も、先ほど浜松市長がおっしゃったように、実は農業の町なのです。また田原市は日本一の農業の町なのです。一緒になって、香港、シンガポール、クアラルンプールなど海外の都市へ販路拡大に出かけていきますと必ず「リンゴはありませんか」と言われます。すぐお気づきですよ。ね。「リンゴは、南信州と組めば用意できるじゃん」。これが私たちの三遠南信地域で一緒にやる答えの一つの典型的な事例かなと思います。私たちが一緒に取り組んだら、すごい力を持っています。日常生活の中で、皆様が普段何げなく感じていることが、外から見たら素晴らしいことだということになかなか気づかないでいます。

それをそれぞれの地域が連携し合うことで気づき、その素晴らしいことをみんなの力として届けることができる、それが三遠南信地域の広域の取り組みの未来像であろうかと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

大変力強い御意見でした。そのためにぜひとも、三遠南信もそうですし、全国どこの地域もそうなのですけれども、ミッシングリンクをなくしていくことを早期に実施することが大事なだろうと思っています。

では、最後になりましたが、SENA 副会長 牧野飯田市長、お願いいたします。

飯田市長 牧野 光朗



今、いろいろな皆様方からのお話をお聞きして、やはり、三遠南信地域というものは非常に結びつきが強い地域だということを改めて感じたところです。それぞれの地域は、もちろん特徴があるのですが、圏域全体で何かまとまっていきたいというある種の求心力が働く。こういった県境地域では、いろいろな県境域の取り組みがあり、今は全国で、そういったことを先生方にも調べていただいておりますが、一番強力で推進しているのは、この三遠南信圏域ではないかと改めて思うところです。

私どもの飯田、南信州地域は、リニアの時代に入ってくれば、当然、三遠南信地域の北

の玄関口としての機能を果たしていくことになると思うのです。東京品川まで約45分、名古屋まで約25分という位置関係になるということは、言ってみれば、通学や通勤ができるわけです。また、現在、北陸新幹線沿いで移住・定住が進んでいる状況を見れば、先ほど高松学長からお話がありましたように、住むには実にいい地域だという見方をする方が多分大勢出てきて、そういった方々が我々の地域に移住・定住していくということになると、またいろいろな可能性が出てくるだろうと考えております。

特に、私が期待していますのは、本日も大学の先生方が何人もいらっしゃっていますが、そうした学術研究をされている皆様方は、大都会のごみごみしたところだとなかなかリフレッシュできなくて、休日に頭を休めるためにリフレッシュできる空間を求めるといったことがあると思うのです。先ほど神野会頭から御紹介いただいたドイツのように、欧米などはみんなそうなのですが、およそ学術研究をやっている皆様方は、週末、山や海に入っていくってリフレッシュして、そして頭を休めることをするわけです。そういう意味では、まさに海もあれば山もあるという三遠南信地域は、学術研究者にとっては非常に活動がしやすい、住みやすい地域になっていくのではないのでしょうか。なおかつ、大都市圏との距離も近いわけですから、そういった地の利を生かす中で、学術研究都市圏をこの三遠南信地域の中にしっかりとつくっていくことができれば、私は大きなポテンシャルが顕在化してくると思います。

実際、そういった地域にこそ、私は、むしろ優先的にとあえて申し上げますが、社会資本整備を促進させて、ミッシングリンクを解消させ、早くそういったポテンシャルを顕在化させることをやっていかないといけないと思います。奥野先生からお話がありました、均衡ある発展はもちろん結構なのですが、今

の右肩下がりの状況ということを考えてときに、ポテンシャルを引き出せる地域に対しての社会資本整備というものは、イノベーション誘発剤としてしっかりと優先的にやっていくことこそが必要ではないかと思えます。

三遠南信自動車道をはじめ、この地域の社会資本整備につきましては、ポテンシャルを引き出してイノベーションを誘発させるのだという姿勢で望むことがいいのではないかと考えております。本日は中部地方整備局の塚原局長もいらっしゃいますので、その前であえて大きな声で申し上げさせていただきますが、この地域こそ日本を引っ張る、それだけのポテンシャルがある地域ですから、ぜひそうした目でこの地域を見ていただきたいと思います。ということを申し上げさせていただきます。

コーディネーター

ありがとうございました。

私は、第1次国土形成計画でも、今度の第2次国土形成計画でも、「国土の均衡ある発展」という言葉はやめようということを主張してやってきたのですが、両方とも失敗いたしました。現在も生きております。北海道の総合開発計画の会長もしております。北海道のミッシングリンクは大事業で、最近「国土の均衡ある発展のフレーズはやめた方がよいのではないか」とあまり言わないようにしております。

皆さんの話を聞いていますと、「第2部があるから話を残している」ということでして、ここでやめたら後で怒られそうなので、もう一回り話をさせていただきたいと思えます。

では、川井先生、お願いします。

愛知大学理事長・学長 川井 伸一 氏

先ほどの補足として2点、お話をさせていただきます。

1点は、先ほど、SENA と愛知大学との提携のお話をいたしました。愛知大学の中に SENA

の事務局分室を置き、事務局の機能強化ということをお話ししましたが、ポイントは、SENA の次期地域連携ビジョンについて、その企画・立案について、愛知大学の中の三遠南信地域連携研究センターがお手伝いをするという役割を担うことです。これ自体は、やはり極めて注目されることではないかと思えます。地域連携と大学とのあり方を考える一つの典型的な事例ではないかと考えております。

もう一つの点でございますが、地域連携にかかわる地域に役立つ人材の育成という点で地域政策学部のお話をいたしました。一つだけ言い忘れたことがございました。地域政策学部の中に、「食・農・環境」という新しいコースを2018年度に設置するというので、今、準備を進めているところでございます。これも、地域政策学部が単に東三河に限らず、三遠南信地域の農業関係の産業に役立つ人材の育成につながっていければと考えているところです。

コーディネーター

ありがとうございました。

今、川井先生から「食・農」にも取り組むという発言がありましたが、これは本当にすばらしいことで、豊橋技術科学大学は、企業の窓口ということでしたが、三河は西三河も東三河も、日本きっての高付加価値の大農業地帯でして、その農家の相談役に愛知大学がなっただけということは大したことだと思います。名古屋大学の農学部は、かつての安城農林ですが、名古屋に移ってしまいました。三河には農に関する研究機関が要るのではないかとずっと思ってきたところです。

では、大貝先生、お願いします。

豊橋技術科学大学理事・副学長 大貝 彰 氏

三遠南信地域がこれまで長い間、この地域のいろいろな広域連携の取り組みをやらせてきましたし、この後の分科会でいろいろな議

論をされるわけですが、そういった中で、いわゆるアカデミックな立場からしたときに、データの整備がなかなかできていないというか、この地域を客観的に捉えるためのデータが整備されていないとつくづく感じています。

最近ではIoTであるとか、AIであるとか、コンピューターの能力が極めて高まっていますし、ぜひ、特にこの三つの県境をまたいだエリアのGISを活用した空間データの整備ということをしつくりやっただいて、それをもとに、本当にこの地域がどうなっているのかということを見える化し、それをもとに新たな広域連携の展開をお願いできたらなということが私の言いたいところです。

コーディネーター

ありがとうございました。

続いて、高松先生、お願いいたします。

学校法人高松学園理事長、飯田女子短期大学学長 高松 彰充 氏

我々は、この地域に住む人、そして、入ってくる人たちの安心と安全を守り続けることにこれからも尽力し続ける、それだけでございます。

一つだけお願いしたいのは、県境、無視できるものは全部無視して、ぜひ一緒にやっていただけるとありがたいなと思います。長野県は、「ほとんど長野、時々松本」で、飯田にはほとんど何も入ってこないのです。ですから、南信というところは長野県ではないと思っている方もいらっしゃる、私も時々会議に行き、「愛知県飯田市の高松でございます」とよく言ったことがあるのですが、それが冗談ではないくらいに、長野市へ行くよりも名古屋市のほうが近いのです。

それが、三遠南信自動車道が通ることで、とても近くなります。だから、これだけ近くて、県境があるから違うところという考え方はむしろ不自然ですから、一体化したものと

して、例えば、同じ市として、同じ県としてというような感覚でぜひお付き合いさせていただけるとありがたいと思います。

コーディネーター

ありがとうございました。

続いて、神野会頭、お願いいたします。

豊橋商工会議所会頭 神野 吾郎

先ほどもお話ししましたが、三遠南信自動車道は物理的にまだ少し時間がかかると思います。ですので、JR飯田線をシンボリックな象徴として、沿線各地の観光資源を南北に結びつけるということとともに、本当の意味での日本の美しい山だったり、村だったり、そういった原風景を楽しめる資源ですし、これは、日本全国、また、世界中から人に来ていただけるような魅力のあるものになると思います。それらを通して、いろいろな活動、いろいろな活動、新しい価値創造ができるプラットフォームになってくるのではないかと考えます。その一つの成功体験を通じて地域をつくっていくというようなことが非常に近道ではないかと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

続いて、大須賀会頭、お願いいたします。

浜松商工会議所会頭 大須賀 正孝

三遠南信地域の連携として、私は何か一つ、形をつくってみたいと思うのです。やはり、経済などいろいろありますが、飯田、豊橋、浜松など三遠南信地域が一緒になって観光のルートをつくってみるなど様々な可能性を探ってみて、口で言っているだけではなく、行動に移すことで、様々な事が見えてきます。例えば、今年のNHK大河ドラマは、井伊直虎を主人公として浜松が舞台ですが、三遠南信地域内にはほかにも縁の土地が沢山あります

し、そういうものをまとめて、一緒になって活動すると、本当に三遠南信地域がすばらしいと感じることができるでしょう。先ほどの飯田信用金庫の三遠南信地域に関する調査のデータの中で、知らない市町村が同じ地域の中でもいっぱいあるから、そういうことのないように、三遠南信地域内のどこもこのようにいいところがあることがわかるように、私は観光等で一体に行なって良いと思いますので、一生懸命努力していただきたいと思いません。

コーディネーター

ありがとうございました。

観光としては、政府は昇龍道に注目しておられますが、これは非常にいいアイデアだと思うのです。昇龍道のルートとして、浜松を起点にして、飯田を通して、それから、馬籠、妻籠を通して、東海北陸自動車道に抜けるルートがあるのではないかと考えています。昇龍道の「龍」は、尻尾でも胴体でも、かなりくねくねできるのがいいので、大事なことだと思っております。

それでは、続いて森山理事長、お願いいたします。

飯田信用金庫理事長 森山 和幸 氏

本業である金融機関の立場で少しお話をさせていただきます。本日、三遠南信サミットは24回目ということでございますが、実は、三遠南信地域に本店を置く八つの信用金庫が三遠南信しんきんサミットという取組みをやっておりまして、これが平成28年度で9年目になります。

そのような中で、今年の夏に三遠南信自動車道に関するアンケート調査を八つの信用金庫が協力して行いました。その結果は冊子にまとめてありますので、もし必要であればそれぞれの金庫へ言っていただければいいのですが、その中でわかってきたことをお話し

いたします。

一つは、地域間の意識の差がまだ非常に大きいということです。これからそれぞれの金庫が中心になって地域間の情報交換や人の交流などに積極的に取り組んでいきたいと思えます。

それと、もう一点、観光というキーワードで三遠南信地域の八つの信用金庫はどう取り組むことができるかということで、実は私どもも本年5月から7月にかけて、浜松地区へお客様を1,000人ほど御紹介させていただきま。三遠南信地域のネットワークの事業としてこうした取組みを金融機関同士がやるということも、交流人口の増加につながるものと考えて取り組んでおります。

それから、もう一つ、地域連携の事業の事例としてお話をさせていただきます。先ほど来、お話が出ています田原市、採石所の跡地の活用策としてサツマイモの栽培に取り組まれる中で、そのサツマイモを何とか生かせる方法はないかということによって焼酎をつくったらどうかということになったそうです。しかし、田原市には酒造会社がないことからお取引信用金庫を通じて私どもに御照会がありまして、飯田の酒造会社を紹介して、「亀若」というブランドの焼酎ができております。このようなことも我々金融機関ができることとして取り組んでおりますので、こうしたことをこれからも広げていけたら地域金融機関としての役割を果たせるのではないかと考えております。

コーディネーター

ありがとうございました。

続きまして、永嶺会長、お願いいたします。

愛知・長野県境域開発協議会会長 天龍村長 永嶺 誠一

では、私から要望ということで1点だけお願いしたいと思えます。今回、私どもは愛知・長野県境域開発協議会としてこの場に寄せさ

せていただいたわけですが、なぜかと考えますと、40年前から、県境をまたいだ、こうした連携や交流をずっと続けてきたという、その評価をいただいたのではないかと感じるわけですが。当地域につきましては、三遠南信地域の地図を見ていただければわかるように、ちょうど中心部にあるわけですが、冒頭、開会の挨拶の中でも出ましたが、次回のサミットで9巡目を迎える時期にもありますので、ぜひ可能であれば、この機会に、三遠南信地域の山間部での開催をぜひ御検討いただければありがたいかなということをお願いいたします。

コーディネーター

ありがとうございました。

続いて、鈴木市長、お願いいたします。

浜松市長 鈴木 康友

手短かに問題提起だけとなりますが、先ほど府県の話をしました、そろそろこの府県とは何かということ、少し考える時期が来ているのではないかと感じています。これは、明治になってから305できた府県が、最初の第一次合併で75になります。明治9年の大合併で38まで減るのですが、それから分離運動が起きて明治21年に香川県が愛媛県から分離して47になるのです。明治21年に47府県体制ができ上がって、129年間、微動だにしないのです。これだけ世の中が変わって、人口移動もしているし世の中も変わったのに、府県だけは変わらないということです。ちなみに、基礎自治体と言われる市町村は、当時、1万9,000弱あったのが、今、約1,700です。世の中がこれだけ変わって、129年変わらないこの府県がどういうものかということ、そろそろ問う時期ではないかということが、私の問題提起でございます。

コーディネーター

ありがとうございました。

続きまして、佐原豊橋市長、お願いいたします。

豊橋市長 佐原 光一

第一点は、先ほど少し言い残されていたインターナショナルなグローバルな動きの中で、地域の企業が、外国から優秀な幹部を呼び寄せるのに学ぶところがないと。もう一方で、我々の地域で、これから世界に羽ばたきたい人たちが学ぶところがないということで、英語を学べる小中高までは我々が責任を持つので、大学についてはぜひ奥野先生たちに責任を持っていただきたいと思っております。我々は高校までに責任が持てる体制を何とか切り開いていきたいということで、第一歩、本年4月から動き始めます。

もう一点は、先ほど来、出ている三河港です。三河港は貿易額で言いますと、全国で成田空港や関西国際空港を入れても9番目、港だけだと7番目です。そのくらい大きな港です。清水港よりも、四日市港よりも大きな港ですので、ぜひ誤解なく、安心してお使いください。

コーディネーター

正直申し上げて、三河港というのは大事な港です。三遠南信の基幹の港であり、さらに、三遠南信自動車道ができるということは三河港にとっても大事だと思います。

それでは、牧野市長、お願いします。

飯田市長 牧野 光朗

最後になりましたが、やはりこういった三遠南信圏域のつながりをしっかりと確かなものにしていくために、人とのつながりをもっともっと深めていく必要があると思っております。

特に、行政としてのつながりをどう深めていくかということにつきましては、これから

が非常に重要になってくると捉えております。

私も南信州広域連合の市町村長は、毎月1回、必ず本人が出席して、地域の広域的な課題について話し、それに基づいた様々な取り組みをずっとやってきております。行政のトップがそうした機会をいかに多くしていくかということが大事になっていくと思います。

ちなみに、私が市長になったころは、本日はらっしゃる浜松市長や豊橋市長とは、このサミットで会って話をする、まさに年に1回の行事というような感がありました。今は、年に少なくとも4、5回は3人で会って話をしているくらい関係を深めております。

私が申し上げたいのは、その3人だけではなくて、やはり三遠南信圏域全体でこういった首長の皆様方の関係をつくっていくためにはサミットだけでは不十分であり、だからこそ三遠南信地域の広域連合をしっかりと検討し、設置することこそが、これからこの地域のポテンシャルを引き出すために、行政としての役割を果たすために非常に重要であると思っています。ぜひそういったことをここでもう一度強調させていただきまして、私からの話とさせていただきます。

コーディネーター

ありがとうございました。

パネラーの皆さんには協力をいただき、ポイントを絞った興味ある発言をいただいたように思います。スーパーメガリージョン構想によって、三遠南信地域には、これまでとは違った未来が待ち受けていると思います。大学教員として言いますと、一つは、牧野市長から話がありました研究環境です。大学に近いということは大事であり、三遠南信地域はいいポジションにあると思います。

それから、2番目にワーク・ライフ・バランスで、皆さんから移住という言葉がでましたが、居住地域で選ばれる可能性は高いと思います。愛知県が、東京に単身赴任している

方を対象に、「リニア中央新幹線が開通した場合こういう条件になるけれども、あなたは単身赴任しますか、通いますか。」と質問したところ、4割弱の人は「通います。」という回答でした。リニア中央新幹線が開通すると、飯田から品川まで行くのにかかる時間は、多分20分から30分だと思います。これは非常にいい条件でありまして、電車賃の問題があるけれども、居住地域の選択肢が変わってくると思います。

それから、安全・安心です。今、国土の強靱化では、海の地震と津波の南海トラフの次のテーマとして、内陸部の巨大地震の話をしております。山が崩壊して天然ダムができる等々のことでして、この地域にもきちんと整備をしなければいけないところがたくさんありますので、その辺にもぜひとも関心を持って安全・安心な地域をつくっていただきたいと思っています。

本日のトークセッションで、今後の三遠南信地域の取り組みにおいて考えるヒントを皆様が得られれば、それで役目を果たせたと思っています。

パネラーの皆様には、時間に御協力いただきました。以上で終わらせていただきます。

ありがとうございました。

